



色の深みがあつて、ほんとうにいいんです。

**井上** 素晴らしいですね。私もぜひ観たいです。

**上野** ぜひともその機会にはお越し下さい。

**井上** それと、もうひとつ印象的だったのは、映画が始まる前の上野さんのアナウンス。「まもなく上映を開始いたします」が、少しだけハイトーンで温かみのある声で、とっても素敵だったんです。ホッとリラックスしました。そして映画が終わって出てきたら、また上野さんが気さくに「どうでしたか？」と声を

かけてくださって、そこでまた話をする。すると、映画の余韻が二倍にも三倍にも膨らむ、他の映画館にはない魅力ですね。

**上野** ありがとうございます。あの時は『しゃぼん玉』という作品を観られたんですね。

**井上** そうです。市原悦子さんが出演された最後の映画ですが、あの映画を高田世界館で観ることができてよかったです。強盗やひったくりなどをくり返して、他人も自分も傷つけてきた若者が、市原悦子演じる婆ちゃんや村の人と出会って、自分を取り戻していく。そういう物語と映画館の魅力がマッチしたような気がします。見終わったらポロポロ涙が出て止まらなかったんですが、他のお客さんもみんなそうで、「よかったね」ってうなずきあいたくな



**井上晶子 Inoue Shoko**

滋賀県出身。新潟県上越市在住。  
 国府教区高田組瑞泉寺坊守。(学) いずみ学園 いずみ幼稚園副園長として、親も子どもも保育者も共に育ち合う「まことの保育」を根幹とした幼児教育に携わっている。  
 国府教区仏教婦人会連盟では、「合唱団こぶしの森」の団員として、また2018年からは恵信尼様顕彰部会の「こぶしの会」部長として、来たる2020年本願寺国府別院「親鸞聖人750回大遠忌法要」及び「恵信尼公750回忌法要」を盛り上げようと、会員と共に準備に取り組んでいる。  
 茶道や美術鑑賞を楽しむ一方、阪神ファンでお笑いを好むなど根は関西人。

# 伝えあい育ちあうということ

冬になると、すべてのものが雪に覆われてしまう豪雪地、新潟県上越市高田。そこに百八年の歴史を誇る日本最古級の映画館「高田世界館」があります。

都会から帰郷し、その映画館を守り続けておられる若き支配人の上野迪音さん。

そして、縁あって上越市に嫁ぎ、お寺の坊守と幼稚園の副園長という二足のわらじを履きながらも、豪雪の地にしっかりと根を下ろし生活をしておられる井上晶子さん。

お二人が対談されたお部屋には春が訪れたような温かさが広がりました。

「高田世界館」という場所

**井上** 先日、高田世界館で映画を観ました。建物が醸し出す魅力なのか、歴史を積み重ねる中で込められてきた人の思いなのか、高田世界館には他の映画館にない「場所の力」のようなものを感じましたね。

**上野** ありがとうございます。足を運んでいただけってうれしいです。この建物は建築当時のまま現在に至っていて、本物ならではの時代色、居心地の良さ、空気感、

匂いなどを感じてくださったのではないかと思います。

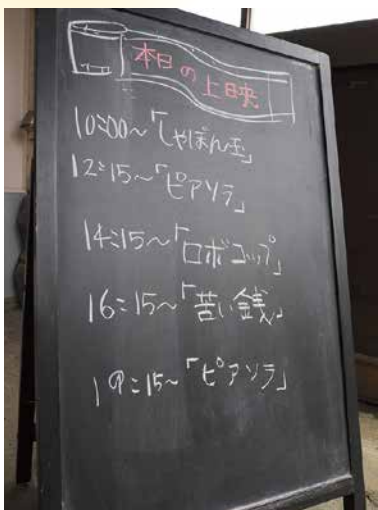
**井上** ノスタルジック(懐かしい)な雰囲気で、タイムスリップしたようでした。

**上野** 今、日本では三十五ミリの映写機はほとんど姿を消しているのですが、世界館では「百年続いたフィルム上映の技術も残す」という考えで、機会あるごとにフィルム上映も行っています。古い映写機だからメンテナンスには手間がかかりますが、フィルム映画は

**上野迪音 Ueno Michinari**

1987年上越市(高田)生まれ。地元の進学校を卒業後、横浜国立大学で映画論を専攻。  
 同大学院在学中に高田世界館で自主制作映画を上映したことがきっかけで、2014年から同館唯一の常駐スタッフとして勤務を始める。現在は若き支配人。  
 日本最古の映画館の支配人として、映画の上映や、演劇、落語、コンサートなどを次々企画し、人と人との交流の場、みんなが輝ける場にしたいと日々奮闘している。  
 そんな彼の姿や世界館の魅力に、全国から映画ファンだけでなく有名な俳優や映画監督、ミュージシャンなども訪れる映画館へと成長を続けている。  
 日本酒を愛し、休日も映画館巡りをする無類の映画好き。一児の父。





**大切なものを奪わせない**

**上野** 最初は映画が好きで映画の勉強をしてきたから、映画館の仕事をしたかったという気持ちで高田に帰ってきました。いざ始めてみると、チラシ作り、ポスター張りから上映、トイレ掃除まで何でも一人でやる日々が続きました。一日中お客の来ない日もありました。けれど

のような、そんな感じでした。

**上野** 『しゃぼん玉』は、たくさんの人に観てもらいました。高田世界館では、ヒットした方です。

**井上** どんな映画を上映するのかも、上野さんが選んでおられるんですね。

**上野** そうですね。映画は単なる娯楽ではない。映画を通して自分が住んでいる世界とは違う世界をみることが出来る。田舎に住んでいても、いろんな世界をみてほしい。そんな願いを持って選んでいます。

### 春がくるよろこび

**井上** いったんは大学で学ぶために都会に出られた上野さんが、高田に帰ってきて、高田世界館の仕事をしていて、若い人が帰って来てくださることは、ここに住む私にとってはとてもうれしいことです。もともと若者がこの町に住んでくれたらと願っ

ています。

**上野** 僕は映画館の仕事がなかったら、おそらく帰ってくることはなかったと思います。この町は疲弊していて、若い人が住むにはつらい場所だと感じていた時期がありましたからね。

**井上** ああ、上野さんもそんなふうに感じておられたんですね。私は幼児教育に携わっています。子育て世代や子ども的人数もだんだん減ってきている、そんな現実を目の当たりにして同じようなことを感じるがよくあるんです。

**上野** 雪がネックなのかな。雪がたくさん積もって長い間消えないところには住みたくなないと……。

**井上** 私は結婚してからここに住むようになったんですが、当時の雪の多さにとにかく驚きました。ここでずっと暮らしていけるのか不安にもなりました。そんなとき夫が、「だからこそ春がきたときの喜びは、ひとしおなんだ。四季

どそれでも、とにかくがむしゃらに前に進むしかないという気持ちでやってきました。

**井上** そして、いつしかこの映画館の魅力が大きく広がって、全国から映画ファンが集うようになり、あなたをサポートしたいとボランティアの仲間が集まってきているんですね。

**上野** 今は映画館だけじゃなくて、地域に根ざしたことをやっていきたいと思うようになりました。地域の人々とながら支え合い知恵を出し合って、高田のまちな文化を守り育てていくことができたらと思います。

**井上** なるほど。広いところから「高田世界館」のことも「文化」のことも捉えようと思えるようになったんですね。

**上野** 僕自身、かなりのひねくれ者、自己否定感も強くて、高田という町も否定するところから入りました。でもそれがあったから、



がはっきりしている、それを楽しめばいいんだよ」と私に話してくれたことがあったんです。子どもは、長い冬、雪国の生活の中でこそ育まれていくもの、そういうものの中にこそ大切なものがあると教えてくれたのだと思います。私自身、そのことがわかるようになるまでには時間がかかりましたけど……。

**上野** 僕は町家で育ったのですが、子どもの頃は表立って「ここに住んでいる」とは言えなかったんです。町家って古くて暗いじゃないですか。引け目さえ感じてい



人は何故「故郷」を懐かしく想うのでしょうか。たとえ、そこが街であろうが田舎であろうが、その場所自体にあまり関係はありません。つまり故郷とは「場所」ではなく、人生の中での「時」であり「思い出」なのです。故郷を離れて、それぞれの生活を営む中で、いつの間にか自分の身を飾ることにだけ夢中になり、地位や名誉や財産といった、様々なアクセサリを身につけてきました。しかし、人生の黄昏を目前に、そのアクセサリも少しずつ輝きを失い、そこには生まれた時と同じ「裸のままの自分」しかいませんでした。泣きたいときに泣き、笑いたいときに笑えた、ありのままの自分が故郷には生きています。そして、そこは、どんな時の私でも無条件に深く包み込んでくれる慈愛の場所でもあったのです。そんな素晴らしい「いのちの世界」を生み出してゆく力を、先人は「土徳」と呼ばれたのかも知れません。



と人とが譲り合って行き交うということも、高田のまちの誇れる文化だと思っています。

**井上** 高田には歴史や風土に育まれた豊かなものがたくさんあるんですね。そしてそれに加えて親鸞聖人や奥さまの恵信尼さまとの縁が深い土地柄の中で育まれ伝えられてきた「土徳」と言えるものが、ここ高田にはあると思うんです。いのちをみつめるまなざしの優しさとか、どのいのちも同じよ

うに大切に感じるとか、それは古くから浄土真宗を依りどころに生きてこられた人が多いからだ、私はそのように思います。

**上野** ちょっと違うのかもしれないが、文化や芸術に触れていると、宗教や信仰に近づくという感覚は僕のなかにもあります。

**井上** 上野さんには、これからもたくさんのお話を期待しています。私にとつて高田世界館は、これからもずっと通い続ける場所か

なと思っています。

**上野** 先日、ある人から「高田世界館があるから、ここで住むことにした」と言われてとつてもうれしかったです。ほんとうに伝えなくちゃいけないものを伝えていくためには、僕たちの世代ががんばっていかなければならないと思います。

**井上** 今日は、上野さんの飾らないお話と熱い思いをお聞きできてよかったです。ありがとうございます。

今はほんとうに大切なものが何かに気づけるようになったし、大切なものを誰にも奪わせないという気持ちで、高田の「まちの文化」を守っていききたいと思うようになりました。

**井上** 「大切なものを誰にも奪わせない」とはどういうことなのでしょう。

**上野** このあたりにはもともと「寄つてきない」と言つて、人を家に招き入れてお茶を飲む文化があったんです。でもそれは、時代の変化とともになくなつてきている。便利さや効率のよさ、物の豊かさが優先される社会が変わつてくる中で、「寄つてきない」と言える余裕がなくなつてきているんです。

**井上** そういう人と人との交わり、コミュニケーションをもっと大切にしていきたいということなんでしょうね。たとえば、高田の朝市は生産者とお客が声をかけ合いふれあう姿が今も続いていますよね。

**上野** この近くに「上海」という食堂があります。建物はとにかく古くて、いろんな人が自分の家のように気楽に訪れている。飾らない普段着の人たちや、おしゃべりな若いカップル、おばあちゃんから孫まで一家揃つてのお客などいろいろいる。僕はそこでいろんなお客さんをみるのが好きなんです。多世代が共に過ごせる場所なのか、空間の包容力があるんです。誰も否定しない空間といつてもよいのかもしれない。そういうものを地元で残していくことができたらいいなと思います。

**井上** 私も「上海」が好きです。亡くなった義父もラーメンが大好きでした。今も家族で時々訪れては、どこかしらホッとする何十年も変わらない味と雰囲気を楽しんでいます。そういう場所ですね。

**「土徳」のあるところ**

**上野** 僕は雁木通りや雪道で、人

#### 「城下町高田の町家と雁木」

街道や人通りが多い道沿いには、間口が狭くて奥行き長い「町家」が並んでいます。

「雁木」は家の前に出た庇のことで、豪雪地の冬期の生活用道路を確保するため、それぞれの町家が民地を提供しあって造られています。総延長は16kmに及び日本一です。

雪や雨の日に、誰もが安心して傘をささずに歩けるだけでなく、お店で買い物したり市が開かれたり、バスを待ったり……行き交う人たちの会話が聞こえる温かい空間です。

